
ロケット日和

秋坂和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロケット日和

【Nコード】

N2895BA

【作者名】

秋坂和葉

【あらすじ】

女子校を舞台にしたトラブル解決物語。

トラブルメーカーである主人公。仲間と一緒に事件を追うが、事態は思わぬ方向へ。コメディータッチの作品です。

ロケット日和(1)

七月の空にはホイップクリームを散らしたような純白の雲が浮かんでいた。

太陽の光が夏の雲に陰影をつけている。立体的な雲は西洋の古城のような存在感を示していた。

風に揺れるショートカットの髪を押さえながら、二宮千夏は小さな発射台の脇に座り込んだ。にのみやちなつ

「うん、このくらいの風なら何てことないね。しっかり頼むぞ」

千夏は発射台にセットされたロケットを眺めた。

水滴を浮かべてロケットが直立している。表面を人差し指でなぞるとひんやりと冷たかった。近所で買った500mlのペットボトルに、少量の水と空気をたっぷり詰め込んだお手軽ロケットだ。発射ノズルは市販品だが、フィンは自作の品だ。

千夏はロケットの脇に胡座をかいて座った。

場所は学校の屋上のだ真ん中、十階の校舎のてっぺんだ。広々としたスペースは打ち上げにはもってこいだった。千夏は台から伸びた発射レバーを握り、カウントダウンを始めた。

「3、2、1、……」

精一杯ゆっくりと数字を読み上げる。そしてカウントが終わった後、千夏は大きく息を吸い込んで叫んだ。

「イグニッション！」

発射レバーを引くと、水がはじけ飛ぶ派手な音が聞こえた。

ロケットは水しぶきをあげながら高々と上空に舞い上がっていった。青空から振ってくる水滴を払いながら、千夏はガッツポーズを決めた。

「よっしっ！ ナイスロケット！」

千夏が拳を握っていると、突然後ろから頭を叩かれた。

「何がナイスロケットだ、このバカ！」

「痛たた……。何だよ、人がせつかく楽しんでるのに」

千夏が振り返ると、そこには天王台てんのうだいなる奈留が立っていた。

「全校集会を堂々とサボって何やってんだ！ みんな体育館に集まってるぞ」

「何言ってるんの奈留。だからだろ？ みんなが留守にしている今しか思いっきり飛ばせるチャンスはないじゃない。見なよ、この惚れ惚れするような青空。まさにロケット日和。何か新しい事が始まりそんな予感に満ちているよね」

千夏は空を仰いだ。

上空に広がるのは透き通るような青色の空だ。その後ろで輝いている星さえ見えてしまいそうだ。

「相変わらずバカだな、超バカ。ロケットバカ」

「バカバカいうな。空に何かが打ち上がるのを見て、奈留はロマンを感じないの？」

「感じねえよバカ。それより春日の奴が怒ってたぞ。探してすぐに連れてこいって」

「ええ〜？ 桜ちゃんが？」

春日かすが桜子先生は、千夏のクラスの担任教師だ。

口うるさい教師で、入学以来、千夏は目をつけられている。彼女の中で、千夏は問題児のカテゴリーに分類されているらしい。

「団体行動が出来ないなんて、学生としてあるまじき事ですって怒ってたぞ」

「桜ちゃんもいちいち細かいよな。そのせいで婚期が遅れてるとも知らずに」

「それ本人の前で言ってみ。大変なことになるから」

奈留はそう言ってポケットから取り出した扇子を広げた。女子高生の持ち物とは思えない、鬼の絵が描かれた渋い扇子だ。

奈留は千夏と同じ学科の同級生で、小学校時代からの古い仲だ。お嬢様風の内巻きミディアムヘア（あまり似合っていない）にピンク色の髪留め。前髪を長く伸ばして、縁なしの眼鏡をつけている。外見だけ見れば、大人しい女子に見えなくもないが、こうした地味の外見はただの飾りに過ぎない。

天王台奈留といえば、元々は手の付けられない不良娘として有名だった。

眼鏡を取って前髪をかき分ければ、他人を竦み上がらせる鋭い両眼が出てくる。

小さい頃から武術を叩き込まれており、逆鱗に触れば悪鬼羅刹のように暴れ回る。中学校時代の同級生に奈留の名前を出せば、財布を置いて一目散に逃げ出すことだろう。

そんな奈留は高校入学を機に「大人しい女子」にイメージチェンジした。

そして奈留が必死に知恵を絞って出来上がったのが、変なお嬢様風ヘアと伊達眼鏡をつけた残念女子高生だ。高校デビューの失敗例としては珍しい類だろう。

奈留がつけているハート型の髪留めは何度見ても嘖き出しそうになる。

一度「頭から毒キノコが生えてるよ」などと冗談交じりで言ったところ、しばらくご飯が食べられなくなるほどのボディブローをお見舞いされた。

しかし、そんな非道い目に遭っても、千夏の中でその面白さは色褪せない。

千夏が奈留の横顔を眺めてにやにやしていると、奈留はおもむろに扇子を千夏の目に突き立てた。

「いぎゃあ！ 痛い、何するの」

「何かとてもむかつく解説をされた気がした」

「な、し、してないよ？ そんなの（たぶん）。それに、だからって扇子で目を突くな、目をっ」

「いいだろ、眼球なんて二つあるんだから一つくらい潰れても」

「よ、よくないよ！ 何なのその恐ろしい発想は。戦国時代の人か！」

千夏は奈留の扇子攻撃を右手で払った。この女は自分の事になると異常に勘が働く。千夏とは子どもの頃からの付き合いなので、何を考えているのかすぐにはれてしまうようだ。

「ほら、それよりさっさと体育館へ行くぞ」

奈留は千夏の耳をつまんで引っ張った。

「痛い、痛いよ。やだよ全校集会なんて、面倒くさい」

「うるさいな、この問題児め。さっさと来い」

「今更行ったって怒られるだけだし、全校集会って長いぞ。一時間は立ちっぱなしだよ。一時間！ だったらお茶でも飲んでゆっくりしていこうよ」

千夏が言うと、奈留は動きを止めた。

「お茶………？」

「お菓子もあるよ」

千夏が言うと、奈留は眉間に皺をよせて考え込んだ。

真面目ぶっているが、奈留だって団体行動が苦手な奴なのだ。一時間じっと立っているのはさぞ苦痛だろう。千夏は甘い声でささやく。

「マンガもあるし、いろいろおつまみも用意してるよ。煎餅に、チーズ鱈に、大福もあるぞ。クーラーボックスには生卵も牛乳も何でもある」

奈留はしばらく考えた後、扇子を畳んだ。

「生卵か……。まあ、それなら……」

奈留はぼそりと呟いた。

(え、生卵が決め手なの?)

千夏はそうツッコミたくなかったが、ギリギリこらえた。

こうしてミイラ取りをミイラに引きずりこんで、千夏は即席お茶会の準備を始めた。

ロケット日和(2)

大きめのコップに生卵を二つ。そこへスプーン二杯の蜂蜜を入れ、醤油を数滴。あとはコップいっぱい牛乳を注ぎ込み、よくかき混ぜる。

奈留はそうして作った謎の液体を半分ほど飲み干し、大きく息を吐き出した。

「くはっ やっぱこれが効くわあ」

「……何なんだよ、その気持ち悪い飲み物は！ 何故生卵を飲む。

おじいちゃんか、お前は」

「これが健康にいいんだよ」

奈留は自慢げに言った。

千夏と奈留は、屋上のフェンスに二人並んで座っていた。

地面には茶色のタイルが敷き詰められており、その上に千夏が持参したお茶やお菓子が並べられている。太陽の光が染みこんだタイルはほんのり温かかった。

屋上のフェンスに寄りかかると、背中から涼しい風が吹き抜けていった。乾いた風は体に溜まった熱を払っていく。奈留は大きく欠伸をしながら呟いた。

「こつやつて屋外でお茶するのも悪くないな」

「そうだな。お前が飲んでるのは全然お茶じゃないけどな」

奈留の欠伸が伝染したのか、千夏も大きな欠伸をした。

千夏と奈留が高校生となったのは、今年の春のことだ。二人とも小学校時代からの腐れ縁で、高校入学後も同じ学科、同じクラスとなった。

二人が通うのはしらおか白丘学園がくえんという、生徒数五千人を超える規模の女

子校だ。敷地もそれなりに広く、校内にはいろいろな種類の建物が乱立している。

白丘学園は女子校にしては珍しく、科学、工学を専門とした教育が行われる学校としても有名でもある。

様々な先端技術を取り入れ、学校の施設も普通の学校に比べてシステム化が進んでいる。校内を歩いていても、何に使うかわからないような機器もよく見かけるくらいだ。

屋上から見える大きな体育館は、五千人近い生徒を収容出来るだけあって、普通の学校のものよりずっと大きかった。

「そつえばさ、全校集会って一体何の話してるの？」

千夏はふと疑問に思っていたことを奈留に尋ねた。

全校集会のことを告げられたのは今朝のことだ。千夏はその急な召集が気になっていた。普通、夏休み明けなどに行われることが多いので、時期はずれでもある。

「ああ、それなら『更衣室荒らし』の件についてだよ」

「更衣室荒らしって、例のあれ？」

「そつ、学校側も重い問題として受け止めてるんだつてさ」

奈留は他人事のように言った。

白丘学園の更衣室が荒らされていたのは、二日前のことになる。

プールの授業や体育の着替えなどで使われる更衣室から、財布や貴重品、水着や下着類が盗まれていたのだ。盗まれた品は100点以上。二日経った今でも犯人は不明で、盗まれたものも見つかっていなかった。

「ふざけた事件だよな。犯人は何考えてんだか」

「今頃女子高生の下着を抱えて、ハアハアしてるんじゃない」

「リアルなこと言うなよ。まあ、金品も盗られてるとはいえ、下着泥棒だから、男が犯人なんだろうな。となるとうちの生徒は除外されるわけか」

「何言ってるんの奈留。そんなのわかんないよ。下着だって売れば金になるし。白丘学園から収穫したてのホヤホヤですっつていえば、箔がついて高く売れるかも」

「発想が完全に犯人だな……。お前がやったんじゃないだろうな」

「ち、違うよ！ 可能性の一つを話しただけ。まあ、男性教師とか？ 後は事務関係の人とかがやった可能性が高いんだろっけどさ」

「でも更衣室付近を男がちよろちよろ歩ってたなら、さすがに誰か気づくだろう」

奈留は首をかしげた。それは確かに奈留の言うとおりだった。

白昼堂々行われた大胆な犯行にも関わらず、目撃者がほとんどいない。それは事件の謎の一つでもあった。

更衣室周辺は体育館や屋内プールへの通路に面している。その通路は体育の授業で頻繁に使われるので人通りは多いはずだった。100点以上の荷物を持ち、誰にも見つからずにそこを歩くのはさすがに無理がある。

腕組みして悩んでいる奈留の横で、千夏はごろりと寝転んだ。

「奈留、そう考えこむなよ、事件ならそのうち解決するからさ」

「何だよ、その根拠のない自信は」

「根拠ならあるよ〜ん、ふひひ」

「何を楽観的な……。解決って、誰がどうやって」

「いるじゃない。こういうトラブルが起きたとき、解決してくれる頼もしい人が」

「頼もしい人？」

「そう、学園のトラブルシューターこと、あたし、二宮千夏がね！」

千夏は勢いよく跳ね起き、ピシッと親指を立てた。奈留はしばらくじとつとした視線を千夏に向けてから、小さな声で呟いた。

「トラブルメーカーじゃなくて？」

「違う違う！ シューターの方ね？ 解決するほう」

「千夏が事件を解決してる所なんて一度も見た事ないんだが」

「ああもう！ このバカ、芋娘がっ！ 見た事のあるものしか信じられないのか？ そんなんだから最近の女子高生はうんたらかんたら……」

「おい、話がすり替わってるぞ」

「とにかく！ この事件はあたしが解決する。その宣言をしに来たんだよ」

千夏はそう言い切ってから、近くに置いてあった銀色のトランクをひっぱり出した。

「というわけで、もう一発打ち上げるぞ！」

「もう一発って、またロケット？」

「もちろん。何ていうか、一つの宣言なわけよ。開会式に花火を打ち上げるのと同じ。しかも今度はど派手なやつね」

千夏が胸を張ると、奈留にじろりと睨まれた。

「まさか火薬燃料は使ってないだろうな……」

「わ、わかってるって。使ってないよ」

「今度学校であんなもん飛ばしたら、間違いなく停学だぞ」

「だから今回は安全性を考えて、火薬燃料不要のペットボトルロケットにしたの！ ちゃんと考えてますよ、その辺は」

「まあ、それならいいけど」

「だろ、安心してそこに座ってな。しかも今回はただのペットボトルじゃないぜ」

千夏はトランクを開け一本のロケットを取り出した。

「はい、というわけで、今度のペットボトルロケットには花火を百発ほどつけてみました」

「結局火薬じゃねえか！」

千夏が取り出したペットボトルロケットには、びっしりと花火が巻き付いていた。

元のペットボトルの表面はもう見えなくなっている。導線は複雑に絡みあって、四方八方に伸びていた。

「ヤバイな、飛びすぎて航空法に引つかかっちゃうよお」

「心配すんな、一メートルと飛ばずに爆散するから」

「それは結果を見てからにしろ！」

千夏は用意したロケットを発射台にセットした。

ポンプを使ってギリギリまで空気を入れ、花火の導火線に着火してから発射レバーを引く。想定通りなら水圧で上空に上がった数秒後、花火に点火し、その推進力でさらに上空へ上っていくはずだ。

千夏はライター片手に早速発射態勢に入った。

「行くぞ奈留、つて、ええ〜っ、ちよつと遠すぎでしょ」

さっきまで隣にいたはずの奈留は屋上の入口付近まで後退していた。

「一人で勝手に焦げ死ね」

「失敗前提でひどいこと言うなよ！ 見てろよ。カウントダウン開始！」

千夏はライターに火を点けて、発射レバーを握った。

「3、2、1……、行っけえ〜っ！」

導火線に火が点いたのを確認し、千夏はレバーを引いた。千夏のかげ声と共にロケットは上空に飛んでいく。

「よし予想どお……、あれ？」

しかし、真っ直ぐ飛んだのは一瞬だけだった。

ロケットはすぐにバランスを崩し、真横に飛んでいってしまった。屋上からどんどん遠ざかっていく。それを見計らって奈留が千夏の隣へ近づいて来た。

「失敗みたいだな」

「な、まだだつ。これから体勢を立て直すんだ」

そう言ったが、ロケットはすでに失速していた。

「ああっ、千夏7号？ しっかりしろ！」

「ああなったらもう無理だな。っていうかあんなの7個も作ったのか……」

失速したロケットは一直線に屋上の外へ落ちていく。

落下地点にあるのは職員用の駐車場。ロケットは学年主任である田所先生のBMWに向かって落ちていった。

「よりによって田所の新車に向かって飛んでくぞ」

「だ、大丈夫、ペットボトルロケットだから、万が一当たっても、それほど衝撃には……」

しかし次の瞬間、空気を裂くような甲高い音が響いた。今になってペットボトルから無数の火花が発射したのだ。千夏は思わず目をつぶる。

しばらく爆発音が鳴り響いた。恐る恐る目を開けると、田所のBMWは真っ白な煙に包まれていた。火薬のにおいは屋上まで届いてくる。

「……」

「……」

「……うん、ある意味、成功！」

千夏は陽気に親指を立てて見せた。

ロケット日和(3)

「ウチの生徒が問題を起こして、本当に申し訳ありませんでした！」
職員室に大きな声が響いた。

広々とした職員室はパーティションで仕切られており、教員のデスクがずらりと並べられている。

インスタントコーヒーのにおいが入り交じった独特の空気を、エアコンの風がかき混ぜていた。

「まあ、先生がそこまで謝ることでは……」

「いいえ、これは担任である私の監督不行届です。まさかウチの生徒が先生の車を燃やしてしまうなんて……」

「ま、まあ、ボンネットとフロントガラスが焦げただけですから……」

目の前にはジャージを着た体格の良い男が座っている。

それは学年主任の田所先生だった。くすんだ青に黄色の三本ラインのジャージは、田所の一張羅だ。

そんな田所に頭を下げているのは、千夏の担任の春日桜子先生だった。
かすがきくら子

年齢は二十代前半だと言いつけているが、おそらく三十前後ではないかと千夏は睨んでいる。桜子先生は千夏と奈留の後頭部を掴み、強引に頭を下げさせた。

「ほら、二人とも私に続きなさい！ 本当に申し訳ありませんでした」

「ホントウニ、モウシワケ、アリマセン、デシタ」

「どうしてカタコトですか！ ちゃんと謝りなさい！」

「まあまあ、春日先生。とりあえず謝罪はいいですから。その、きちんと指導をお願いしますよ、ええ……」

田所はしばらくの間、居心地悪そうに頭を掻いていたが、やがて部活があると言って立ち去ってしまった。

愛車が焦げたのがショックで怒る気力もないようだった。少しは
げ上がった頭頂部と、曲がった背中に哀愁が漂っている。

田所が出て行ったのを見送ってから、桜子先生は千夏と奈留の方
に振り返った。

言いたい事を山ほどため込んでいる、そんな表情がそこにあつた。

「それじゃ、ゆっくりと話を聞かせてもらいましょうか。今回の騒
動は、どちらが主犯ですか！ 正直に答えなさい」

桜子先生は千夏と奈留の前に立つ。

身長が低いので二人を見上げるような格好になる。桜色に薄く塗
られた唇を尖らせながら、上目遣いに二人の様子をうかがっている。
奈留は一つため息をついてから口を開いた。

「そんなの決まってるだろ。もちろん千夏」

「はい、奈留が主犯です」

奈留が言葉を言い終わる前に、千夏はきっぱりと言い切った。

「そう、天王台さん、あなたなのね」

「ちげえよ、簡単に騙されんな！ 全部こいつの仕業だったの」

「桜ちゃん、桜ちゃん、奈留は『ああ全校集会めんどくせえ、ゲ
へへ』といって屋上で堂々とサボってました」

「何だよ、その似てねえモノマネはっ！ サボってたのはお前だろ
うが」

「ぎゃあああ、痛い痛い！ 離せ、このゴリラ女」

奈留は片手で千夏の頭を掴み、思いつきり締め上げた。

千夏のかめかみに激痛が走る。まるで万力で頭を挟まれているよ
うだ。奈留の馬鹿力は人としての許容範囲を超えている気がする。

桜子先生は慌てて千夏と奈留の間に入った。

「こら、二人とも止めなさい！ 本当に毎回毎回あなたたちは……。
そもそも、今回はどういいう経緯でこんな騒動を起こしたのか説明な
さいー！」

「そんな、いつも面倒事起こしてるみたいない方して。桜ちゃ

んのお茶目さん」

「いつもじゃないですか！ 入学してから何度目です？ 入学早々上級生と喧嘩して相手に怪我させる。水槽の魚をさばいて食べようとする。他の先生のパソコンをいじって勝手にデータを消去する。校庭で火薬ロケットを打ち上げてサッカーのゴールネットを燃やす。他にも数え切れないくらいあります」

桜子先生は自分の膝を叩いた。ストレートの黒髪が乱れている。これはかなりお冠のようだ。

「だいたい何ですかその態度は！ 先生を呼ぶときは『春日先生』と呼びなさいと何度も言っているはずですよ。二宮さん、あなたは今悪い事をして叱られてるんですよ。もう少しそのへんの自覚をですね」

それから桜子先生の一方的な叱責が続いた。千夏は目をつぶって、それに耐えた。

奈留の方を見ると、明らかに不服そうな顔で腕組みしている。相変わらずこういう反抗的な態度は堂に入っている。

それから延々と桜子先生の説教が続いたが、話が一瞬止んだのを見計らって、千夏はそつと口を開いた。

「あのですね、今回の打ち上げはですね、例の騒動を解決するための狼煙のうしなんですよ」

「例の騒動……？ まさか更衣室荒らしのことですか」

「はい、それですよ、それ！ 今回はその更衣室荒らしを捕まえて、盗まれた物を取り返してあげようと思ってるんです、はい」

千夏は堂々とした口調で言った。

これを聞けばさすがに桜子先生も黙るだろう。学校で起きている問題を積極的に解決しようとする生徒。我ながら素晴らしい生徒だと、千夏は自画自賛した。

桜子先生もさぞ感動しているだろうと思って、ちらりとその様子を覗くと、そこは鬼と見間違っほど目をつり上げて怒る桜子先生の

顔があった。

「更衣室荒らしの件は学校側に任せておきなさいと言ったはずですよ！」

桜子先生はそう叫んだ。

その怒りように、千夏は肩を竦めた。あまりの大声に遠くのデスクで仕事していた教員が驚いて顔を上げたほどだ。

「何度かホームルームでも言いましたよね！ この件は生徒が首を突っ込んでいい話じゃありません。学校側、場合によっては警察の仕事です。あなたはサボっていたから知らないかもしれませんが、全校集会でもそういう注意喚起があつたんですからね」

桜子先生は千夏の耳元で怒鳴り声を上げた。

「桜ちゃ……、あ、春日先生、聞こえてます、聞こえてますから、もっとポリュームを……」

「もしかして、このところ、こそこそ校内の更衣室を調べたり、入室記録を漁ったりしているのもあなたたちですね！」

「え？ そんなことやったかな……」

「いいえ、あなたで間違いありません！ あなたで間違いありません！」

桜子先生は言い切った。

桜子先生は興奮すると同じ台詞を繰り返して叫ぶという変な癖がある。

もはや学校の全ての悪事が千夏のせいだと言い出しかねないテンションだった。このようにスイッチが入った状態だと、とても面倒臭い先生なのだ。

「とにかく更衣室荒らしの調査は全面的に禁止！ こうした問題行動は控えてもらわないと。ただでさえ、これからいろいろあるっていうのに……」

「問題行動って、そんな……」

「少しそこで待っていなさい！」

桜子先生はそう告げて、職員室を出て行ってしまった。

千夏はしばらくの間、桜子先生が出て行った扉をじっと眺めていた。

「桜ちゃん、どこへ行ったんだろうな」

「呆れて帰ったんじゃないの？」

奈留はあくびをかみ殺しながら答えた。

奈留は千夏が延々と叱られている間も、耳の穴をほじって退屈そうにしていた。友だちをフォローする発言を一つもしないあたりは、奈留らしいと言えば奈留らしい。

「あ、もしかして、あたしの決意表明に感激して何かお礼を持ってこようとしてるとか？」

「今の会話でそれはあり得ねえだろ！ それよりこの隙に帰ろうぜ」

「あ、それナイスアイデア。桜ちゃんには悪いけど逃げるか」

千夏と奈留が席を立とうとした瞬間、再び扉が開き、桜子先生が現れた。

「まだ帰っていいとは言ってますん！」

「げ、聞いてたの？」

「聞いてましたとも！」

桜子先生は再び職員室に入ってくる。どこから持ってきたのか、桜子先生は両手にバケツを持っていった。

そして千夏の前にバケツを差し出した。中には洗剤やたわしなどの掃除用具が入っている。

「あ、掃除用品は間に合ってるんで……。気持ちは嬉しいんですがお返しします」

「別にあげるわけじゃありません！」

桜子先生は首を振ってこう言い放った。

「あなたたちには罰としてプールサイドの掃除をしてもらいますからね！ そう、プールサイドの掃除をしてもらいますから！」

「ああ……、面倒くさいなあ、もう。早く帰ってゴロゴロしたいのに」

「お前のせいなのに、何でこっちまで巻き込まれないとならないんだ。ったく」

奈留はデッキブラシで床を磨いていた。乱暴にこするので、奈留の足下には大量の泡が落ちている。

千夏はホースで水をかけて、奈留の足下の泡を払った。

「仕方ないだろ、文句なら桜ちゃんに言えよ」

二人は校内の屋内プールで掃除をしていた。

そこは25m用、50m用、飛び込み用のプールが三面用意されているプールで、天井は透明なドームになっている。

ドームを通して見える空は、夜になる一步手前の淡い紺色に染まっていた。

「お前、本気で更衣室荒らしの件、調べるつもりか」

「あつたり前だろ。トラブルを見て見ぬ振り出来るか。他人に迷惑をかけるなんて許せない！」

「お前は、今日あたしにどれだけ迷惑かけたと思ってんだ、コラ」

奈留はそう言って千夏の右頬に拳を押しつけてくる。

「にゅにゅ……、だつれ、今回ののはしょうがないじゃないか。まさかああなるとは……」

「まったく、貴重な放課後を無駄にしたし」

「何だよ、奈留は部活も何もやってないくせに……」

「お前もだろ。あたしはゲームしたり、撮り溜めておいたアニメを見たりと忙しいんだ」

「ちっ、インドアヤンキーめ……」

千夏が小声で呟くと、奈留の蹴りがすっ飛んできた。

千夏は咄嗟に体を反らして避ける。奈留の踵が鼻先をかすめてい

った。

「次ヤンキーって言ったら、その鼻潰す」

「発言が怖いよ！　っていうか今避けなかったら潰れてたよ！」

「あ、そうか。変に血とか出されたら、床が汚れて掃除が面倒か…」

…

「そ、そういう問題じゃないだろ！　床の汚れとかじゃなくて…」

「ほら、いいからさっさと掃除しろ」

「言われなくてもわかってるよ！」

二人は黙々と掃除を続けた。

「それにしてもさ、一つ気になったんだけどさ。さつき桜ちゃんが言ったた、更衣室や入室記録を調べてるのって奈留がやったの？」

しばらくして千夏は思い出したように話はじめた。

「知らねえよ。お前じゃないのか？」

「え、あたしはそんな事してないよ」

「じゃあ、お前以外にも事件を追ってる人間がいるってことか？」

「う、ん、でも、この件に関わるような生徒はいないと思うんだけどな」

千夏はそう言って考え込んだ。

今回被害に遭ったのは、ほとんどが一年生だった。

正確に言つと、ちょうどその時体育の授業をしていた、一年一組から三組の生徒が対象になる。

桜子先生も言っていたとおり、今回の件は生徒が首を突っ込まないように、学校から注意も出ている。おそらく犯人が教員や事務員ではないかという疑惑が強いからなのだろう。

その状況下で積極的に事件解決に動くような生徒はぱっと思いつかなかった。

「まあ別に気にすることじゃないだろ。ほら、これで掃除終わりだ」

奈留はそう言ってデッキブラシで床を叩いた。早く水を流せという合図らしい。

千夏は奈留の足下にホースを向けた。水で流すと茶色く汚れた泡が流れていく。これで大体の床は磨き終わったことになる。

「あとは水を切って終わりかな。さっさと帰ろう」

「ここまでやれば、文句はいわれないだろ」

時計を確認すると、すでに時刻は十九時近くになっていた。二人は掃除用具をしまい、プールサイドを後にした。

ロケット日和(4)

プールサイドの掃除を終えた二人は、中央棟へ続く通路を歩いていった。

中央棟は高等部の一年生から三年生の教室がある。その中央棟と屋内プール、体育館を繋げているのが、この通路になる。

広い通路で、ダンプカーが通れるくらいの幅があった。アーチ状の天井には、ランプ形の電灯が提げられている。廊下の電灯は自動点灯式で、千夏たちが歩くとセンサーが検知し、勝手に明かりが点灯する仕組みになっていた。

この時間になると、さすがに残っている生徒はいない。広々とした静かな通路に、二人の足音だけが響いた。

そこでふと千夏は立ち止まり、前を歩く奈留を呼び止めた。

「おい、奈留、奈留。帰る前にここ寄ってかない？」

千夏は通路の途中にある入口を指さしながら言った。

その先には更衣室荒らしが起きた、問題の女子更衣室がある。

「なんだよ、更衣室を調べても何も出てこないだろ」

「わかってるけど、一度くらい現場を見ておきたいんだって」

千夏はそう言って奥へと入り、女子更衣室の扉の前にしゃがみ込んだ。何気なくドアノブを捻ってみたが、ドアノブは固定されていて、ぴくりとも動かなかった。

「うーん、やっぱりちゃんとロックかかっているよな……」

扉のすぐ横には、カードの読み取り機が設置されている。奈留は制服のポケットから学生証を取り出し読み取り機に重ねた。ピッと電子音の後に、錠の落ちる音が聞こえた。

「当たり前だ。更衣室の扉が壊れてたら問題だろうが」

そう言って奈留がドアノブを捻ると、すでにロックは解除されており扉はすんなりと開いた。

「やっぱり入館システムは問題なし、と」

千夏は言った。

白丘学園はセキュリティが配慮された学校だ。

特定の教室には入室制限がかけられており、入館証を通さないとロックは解除されない。

千夏たちの場合、学生証がその入館証がわりになっていた。さっきのようにカードの読み取り機に学生証を重ねることで、許可された区画なら自由に出入りできるようになっている。

個人の入室情報も記録されており、後から調べれば誰が何時に入りしたかはすぐにわかるようになっていた。

そして、今回の更衣室荒らしで最も謎とされているのが、この入室記録についてだった。

本来なら、更衣室荒らしが起きた時刻（七月十五日の十四時付近）を調べれば、犯人はすぐ判明するはずだった。

しかし、事件の後、教員が記録を調べても更衣室荒らしがあった時間帯の入室記録は残っていなかったという。犯行のあった時間にこの扉を開けた人間はいないにも関わらず、更衣室の物品は奪われている。その謎が未だに事件解決に至っていない要因らしい。

「さうて、中も調べてみるか。失礼しますよつと」

千夏は更衣室に入り、室内の電気を点けた。

室内は明るくなり、ずらりと並ぶロッカーの列が浮かび上がった。教室ほどの広さがある更衣室は綺麗に整頓されている。

やはり、ぱつと見て変わった所は見あたらな。千夏は何気なくロッカーを開けたり、床にしゃがみ込んだりしてみたが、それでも同じだった。

奈留はせわしなく更衣室を調べる千夏の頸動脈を指で挟んだ。

「ほら、わざわざ入って調べるほどのことでもないだろ。何も異変はないっての」

「ちょ、ちょっと、人の頸動脈を掴まないで！」

「気が済んだろ、さっさと帰るぞ」

「わかったよ、もう……。っていつか何でそんなに正確に人の頸動脈を掴めるの？」

「小さい頃、家で習ったんだよ」

奈留は言った。「どんな家だよ！」と言いかけたが、千夏は言葉を飲み込んだ。

奈留の言うとおり、更衣室については事件後に教員たちがちゃんと調べている。そこで何も発見されなかったのだから、千夏がちょっと調べて新しい事実が判明するはずがない。

千夏は諦めてその場から立ち去ろうとした。

しかしその時、背後から僅かな物音を聞いて立ち止まった。

「ん、誰がいる……？」

部屋の奥から何かがぶつかるとような音が聞こえた気がして、千夏は振り返った。

どうも部屋の奥に誰かが潜んでいるような気配がする。こんな時間に生徒が残っているのは不自然だし、部屋に入った時は電気が点いていなかったはずだ。

「ねえ奈留、この部屋に誰か隠れてない？」

「な、何だよ、急に変な事言うなよ。誰もいないはずだろ」

「いや、物音が聞こえたからさ」

「おいおい、だから変な事言うなって」

「うーん、案外幽霊だったりして」

千夏はからりとした口調で言った。

「よし、ちょっと見てきてみるか」

千夏そう言って、音のする方へ進もうとした。

しかし、一歩進んだ所で、急に後ろに引き戻された。何事かと振り返ってみると、奈留が千夏のスカートの裾をしっかりと掴んでいた。

「……何してんの？ 奈留」

「ちょ、ちょっと待て。一人で行こうとするな」

「じゃあ奈留も来なよ。いつものように先陣を切ってさ」

千夏は奈留の背中に手を回したが、奈留の体は岩のように固まっていてびくともしなかった。

「ち、千夏が先に行け。これは命令だ！」

「ええ、何それ！」

「うるさい、早くしろ！ 動脈ねじ切るぞ」

「ひいっ、わかったよ先に行くよ。ぞっとする発言するなあ、もう……」

千夏は奈留に言われるままに、ロッカーの並んだ列を一つ一つ見まわりながら先へ進んだ。

更衣室はしんとしていた。

一瞬間こえた物音も気のせいではないかと思ってしまうほどだった。千夏は一步一步、地面を確認するようにして歩く。

というのも、さつきから奈留が千夏のスカートを掴んだまま離さないからだ。

「ねえ奈留……、いい加減にスカート離してよ。下着が見えちゃうよ」

「な、べ、別に掴んでねえし！」

「掴んでるよ！ 何でそんなすぐバレる嘘つくの？」

千夏は立ち止まり、ぞっと奈留の手を払った。奈留は渋々手を引つ込めた。

「よし、気を取り直して行くか」

千夏は改めて先へ進もうとする。

しかし今度は奈留に右腕をしっかりと捕まれた。奈留は千夏の腕を両手で抱え、思いつきり体を押しつけてくる。

「あの……、しがみつかれると歩きにくいんだけど……」

「う、うるせえ、しがみついてねえし！」

「しがみついているじゃん！ もう、さつきから何なの？」

「いいから、先に行けっ！ 先に」

「……まあいいか」

奈留は千夏にぴったりと体をくっつけてくる。腕から奈留の体温が直に伝わってくる。一步進むたびに千夏の腕を締め付けてくるので、二人三脚をしているようでとても歩きにくかった。

耳元で奈留の息づかいを感じながら、ゆっくりとした足取りで奥へ進む。

奥へ行くにつれて、やはり誰かが潜んでいるような気配は強くなっていた。

「奈留、やっぱり誰かいらない？ ちょっと確認を」

「大丈夫大丈夫あたしは夫大丈夫全然大丈夫大丈夫問題ない大丈夫大丈夫」

「何か唱えてる〜っ！ ちょっと、人の話聞いてよ、ほら先行こうよ！」

「聞こえない聞こえない何も聞こえない聞こえない全く聞こえない聞こえない」

「聞けよ！ あたしが嘘ついてるみたいじゃないか」

千夏は腕にしがみつくと奈留の体を揺すった。その時、千夏は足下に落ちていた空き缶を蹴飛ばした。乾いた音が床に響き、奈留は悲鳴をあげて千夏に抱きついた。

「ひいいいいっ」

「ちょっと、奈留、くっつくな！ 空き缶蹴飛ばしただけだよ。押すなっ！」

奈留に押されて、千夏は壁に手をついた。そこには電灯のスイッチがあり、千夏は誤ってスイッチを切ってしまった。

その瞬間、室内は暗闇に覆われる。

「あ、電気消しちゃった 奈留ごめ」

千夏が謝ろうとしたが、それを奈留の絶叫が遮った。

「なまああああああああああああああっ！」

「えっ？ な、何？ 生……？」

「くそ、幽霊の野郎！ 電気消しやがった！ ちくしょう！ どこ」

だ、幽霊！ コラア」

突然奈留は暴れ始めた。拳の風圧が千夏の髪を揺らし、慌てて奈留から離れた。

「おい奈留、落ち着け！ 幽霊じゃないって、今のはあたしが間違っ
つて電気を」

「お前、お前かつ！ じゃあお前が幽霊か！ よくもこれまで騙し
てたな」

「違うよ！ 落ち着け、興奮しすぎだ、このバカ」

「そこか！」

奈留は正拳突きを繰り出した。拳が千夏のこめかみをかすめてい
った。

千夏の手の甲に髪の毛が数本落ちた。拳圧で髪が切れたようだ。

それに気づいた千夏の背筋が凍った。こんな攻撃をまともに食ら
ったら死んでしまう。千夏は暴れる奈留をかくぐつて、電灯のス
イッチを入れ直した。部屋が明るくなると同時に、奈留は動きを止
めた。

「電気、点いたか。幽霊、幽霊の野郎はどこだ？」

「な、奈留、落ち着け。幽霊じゃないよ。あたしが間違っつて消しち
やっただけだから……」

「本当か、幽霊じゃないのか」

「そつだよ、だから落ち着け」

千夏は息を切らしていた。そして床にぺたんと座り込んだ。

「そつだ、奈留はオカルト苦手だったんだっけ。すっかり忘れてた
よ……」

奈留は昔から、幽霊や怪現象の話が大の苦手だった。

中学校時代は、奈留の近くでお化けの話をする喉を潰されると
いう逸話（そつちの方がよっぽどホラーだが）が広がっていたほど
だ。

どうしてそこまで幽霊を怖がるかは未だにわからない。とにかく

奈留はオカルト系の話には過敏に、そして暴力的に反応するのだ。千夏からしてみれば幽霊よりも奈留の方が数倍怖い。

「嘘だ。いるんだろ幽霊、幽霊はどこだぁ……」

奈留はまだ戦闘態勢を解かない。迂闊に間合いに入れば流血必至だろう。

千夏は奈留をなだめるように声をかけた。

「なぐる、大丈夫だって、幽霊はいないよ、だから落ち着け」

「お前！ 誰かいるって言ったろうが！」

「いや言ったけど……、きつと幽霊とかじゃないよ。たぶん不審者だ不審者。ほら、ナイフを持った暴漢とか」

「うん、まあ、そっか、ならいいか……」

「それで納得するの!？」

普通はナイフを持った暴漢のほうが怖い気がするが、奈留の物事のとらえ方は常人のそれとは少しずれているようだ。

千夏はまだ興奮冷めやらない奈留の背中を押した。

「よし、帰ろう奈留、さあ帰ろう。アイス奢ってやるから」

「何だよ、誰かいるって言ったろ。それを確かめるって」

「ああ、気にしない気にしない。ただの不審者不審者。そっとしておいてあげよう」

確かに物音の正体は気になるが、奈留をこの状態のまま放置しておくほうが危ない。

千夏は奈留を押しして出口に向かって歩いて行く。

すると、千夏の上履きが再び何かを蹴飛ばした。足下を見てみると、そこにはピラミッドの形をした変わった機械があった。

「な、今度は何だぁ！」

奈留は再び叫ぶ。

千夏の足下では、不思議な機械がうごめいている。体を回転させながら、その機械は床を塗りつぶすように動いていた。

「奈留、落ち着け。これは違うよ。掃除ロボットだよ」

「掃除ロボット？」

「この学校で使われている清掃システム。生徒のいない時間に自動で掃除してるんだよ。」

千夏はそう言っただけで足下の機械を拾い上げた。

ピラミッド先端の電源ランプは緑色に点灯し、二本のアームがうねうねと動いている。

床に下ろすと、掃除ロボットは千夏の足下を動き回る。かすかに聞こえるモーター音は、床のほこりを吸い込んでいる音だ。

「な、普通の掃除ロボットだろ？ 決して幽霊じゃない。」

「まあ、そうだな……、うん。ロボットは幽霊にならないしな。」

掃除ロボットは床に落ちた空き缶を器用にアームで拾い上げた。

ピラミッドの頭部が開き、拾い上げた空き缶はそこに収納される。掃除ロボットはとても良く出来ていて、壁の掃除もしてくれる上に、落とし物まで拾ってくれるのだ。

白丘学園ではこの掃除ロボットを使った自動清掃システムを試作的に導入している。

毎日、生徒のいなくなる時間帯になると、この掃除ロボットが稼働し各フロアの掃除をしてくれるのだ。これで掃除の手間はだいぶ少なくなっただろう。

「じゃあ千夏が聞いた物音もこのロボットか？」

「うーん、こんな機械音じゃなかったような……。」

「じゃあ幽霊だな。」

「ああ、違う違う嘘嘘嘘。そうだ、これだったよ。うん、これに間違いない！」

千夏はそう言い切った。

実際のところ、千夏の聞いた物音と、掃除ロボットの機械音はだいぶ違った気もするが、この場で奈留に言うことではない。

「さあ、とりあえず帰ろう帰ろう。ね？」

千夏は奈留を押し出すようにして出口へ向かう。

「わかったから、離せよ。」

奈留は千夏の両手を払った。

とりあえず奈留の興奮は収まったように見えた。その反応に安心し、ほっと胸をなで下ろすのも束の間、次の瞬間、再び室内の電気がぷつりと消えた。

「おい千夏、またお前か。次やったら怒るからな」

奈留は千夏の背中を叩いた。

暗闇の中で、千夏はゆっくりと顔を上げる。息を潜めて周囲の様子をつかがう。停電かと思っただが、そういう訳でも無さそうだ。

「……いや、あたしは何もしてないぞ」

千夏は小声で呟いた。

「え……？」

奈留はそう言って固まってしまった。

その時、更衣室の扉が開いた。そして入口から何者かが出て行った。

「あゝっ、やっぱり誰かいた！ 今、部屋を出て行ったぞ」

「こ、この部屋に？」

「ちよつと捕まえてくる！」

千夏はそう言って更衣室を飛び出していった。

更衣室から出た時には、すでに廊下には誰もいなかった。

相手はかなり足が速いようだ。しかし幸いなことに、自動点灯式の電灯がターゲットが進んだ方向を示してくれていた。千夏は照明が灯っている方向へ走って行った。

しばらく走ると、廊下の途中で照明は消えていた。立ち止まり、周囲を覗いた千夏は、一つの扉を発見する。

その扉だけ中から光が漏れていた。誰かが中にいる。状況から考えて、ここに入り込んだ可能性が高い。

千夏は一呼吸置いて扉を開いた。

「動くなっ！ もう逃げ場はないぞ！」

扉を開けると同時に千夏は叫んだ。

部屋の中を見渡す。そこは畳が敷かれた四畳間となっていた。

部屋の中央にちゃぶ台と座布団が置かれている。ちゃぶ台には湯飲みが置いてあり、そこから白い湯気がたっていた。

そして座布団の上に、一人の少女が座っていた。

千夏はぼかんとその場に立ち尽くしていた。というのも、目の前に座る少女が、ひどく場違いな格好をしていたからだ。

少女は水玉模様のパジャマを着て、頭の上にサンタ帽のようなナイトキャップを乗せていた。

パジャマの袖も裾もかなり布が余っている。パジャマが大きすぎるといふよりは、少女が小柄過ぎると表現するほうが正しそうだ。

ぼさつとしたポブカット風の髪型。右側の髪の毛だけが、外側に跳ねていた。パンダらしき動物のぬいぐるみを抱え、不思議そうな顔で千夏の事を見つめている。

「誰？」

ぼそりとした口調で少女は言った。

くつきりとした二重まぶた。分度器を逆さまにしたような形の目。少女は眠そうな視線を千夏に向けてくる。

「それはこっちの台詞だ。そっちこそ、こんな時間にそんな格好で何してる」

「夜だからパジャマだけど」

「それがおかしいだろ！ 何で学校でパジャマ着てるんだよ。それより、さっき更衣室に潜んでいたな。どうしてあんな所に隠れてたんだ」

千夏が言うと、少女はぼつと天井を見上げていた。そしてかなり長い間を置いて、ぼそりと答えた。

「身に覚えないけど」

抑揚のないしゃべり方で、少女は答えた。

声も見た目も子どもに近い。おそらく中等部、もしかすると学校に入り込んだ小学生かもしれない。

しかし見た目の割に物腰は落ち着いている。はっきり言って凶太いと言ってもいいくらいだ。

「とぼける気か。まあいいや。それよりお前は何故こんな所にいるんだ。中等部の生徒？」

千夏が言つと、少女は首を傾けた。

千夏はしばらくの間、少女の反応を待った。しかし、少女は座布団に座つたまま、ちゃぶ台の上に置かれたお茶をゆつくりと飲み始めた。

「おゝい、話は終わってないぞ！ 勝手にくつろぐな」

千夏はそう言つて少女が抱えるパンダのぬいぐるみを取り上げた。

「あ、P3 LOOK3」

「な、何そのコード。このぬいぐるみの名前？」

「覚えやすいので」

「覚えにくいよ！」

千夏は思わず叫んだ。

少し言葉を交わしただけが、話していると調子が狂う相手だった。返答は断片的でわかりにくく、表情がほとんど変わらないので反応も掴みにくい。

「そもそも、どうしてこんな時間にこんなところにいるんだ」

千夏が尋ねると、少女は千夏の顔を見上げ、聞き取りにくい声で言った。

「あなたは？」

「ああ、そっか、まずはこっちから名乗らないとな。そんなにあたしの事が気になる？」

千夏は不敵に笑った。しかし少女は千夏を無視してお茶を飲んでいた。

「お茶おいしい」

「話終わってる〜！ 全然こっちに興味ないし！」

千夏は思わず叫んだ。

怪しい。

とにかく怪しい。

こんな時間に校内でくつろぐ生徒なんているはずがない。そう考えた時、千夏は自然に一つの結論に行き着いた。

「さては、お前が更衣室荒らしの犯人か！」

千夏はそう言って、ビシッと少女を指さした。

少女は黙ってお茶をすすっている。

千夏は少女の顔色の変化を覗おうとしたが、全くその表情は変わらない。指を突き立てたまま、少女の鼻先まで顔を近づけても、黙々とお茶を飲むのを止めようとしなかった。

「こ、この〜。あくまでとぼける気か」

千夏は歯ぎしりする。これだけ堂々とされると、こちらが萎縮してしまう。

こうなれば力尽くでも。

千夏が少女を連行しようとしたとき、少女は突然湯飲みを置いて立ち上がった。

「あ、そろそろかな」

少女はそう呟くと、パンダのぬいぐるみを小脇に抱え、千夏の横を通り過ぎていった。

ふわっとシャンプーの良い香りがする。青リンゴのような爽やかなにおい。

千夏が振り返ると、すでに少女が部屋を出るところだった。

「ええ〜っ？ 何その自由っぷり！ まだ話は終わってないぞ！」

「あ、鍵、しめといて」

少女は千夏の呼び止めを無視して、部屋から出て行ってしまった。千夏が慌てて少女に続くと、すでに少女は廊下の角を曲がってしまっていた。

「あいつめ、どこに行くつもりだ」

千夏は少女の後を追った。

少女が曲がった先にあるのは屋内プールだ。
プールで一体何をするつもりなのだろう。疑問に思いつつも、千夏は後を追って走る。

そして曲がり角を曲がるうとしたところで、千夏の耳に女子の悲鳴が聞こえてきた。思わずその場に立ち止まる。

「この声……、奈留か？」

声が聞こえたのは屋内プールのあたりからだ。

千夏は急いで声のする方へ走った。

千夏がプールの入口にたどり着くと、そこに座り込む奈留の姿を見つけた。

「おい、奈留、どうした？」

千夏は呼びかけたが、奈留は床に座ったまま、うつたえていた。そして千夏の方を振り向くと、プールの辺りを指さして口をぱくぱくさせた。

「ひ、ひっ、ひひひ……」

千夏は奈留の指さす方をじっと見つめてみる。

奈留は50mプールの真ん中あたりを指さしている。暗くて何があるかよくわからないが、特におかしな点は見あたらなかった。

「どうしたんだよ、奈留。何も無いけど」

千夏が言くと、奈留は小声で呟いた。

「火の玉……」

「えっ？」

「あそこに火の玉が出たんだよ！」

奈留はそう叫んで、その場に気絶してしまった。

ロケット日和(5)

一晩明けてやってきた土曜日を、千夏は憂鬱な気持ちで迎えていた。

土曜といえば、学校で使い切った気力、体力を回復させる日だ。予定を立てて出かけるのもいいし、一日中家に籠もってインターネットに興じるのもいい。ゲームも悪くないし、突発的に誰かの部屋に遊びに行つて一日中くだらない話を続けていたつていい。

しかしそんな自由な土曜日も、今日に限っては問題事で埋まりそつだった。

「それで、奈留の具合はどう？」

「体は大丈夫だと思いますけど、やっぱり精神的に不安定になつてるみたいですよ」

千夏の目の前には並木水菜なみきみすなが座っている。

水菜は洗面器にタオルを浸していた。水の張った洗面器には大きめの氷がいくつも浮いている。水菜はタオルをきつく絞つてから、ベッドに眠る奈留の額にそつと置いた。

「悪いね。部屋とベッド、占領しちゃってさ……」

「私は全然平気です。それよりも奈留さんのことが心配で……」
水菜はそう言つて、奈留の掛け布団を直した。

千夏は「あおい寮」と呼ばれる白丘学園の学生寮で暮らしている。水菜と奈留とはクラスメイトであり、同じ寮の隣人同士でもあった。

昨日の夜、火の玉を見たと言つて気絶した奈留を寮まで運んだのは千夏で、その看病を自ら買つてでてくれたのが水菜だ。

「それにしても奈留のやつ、水菜の気も知らずぐっすり寝てるな。髪の毛を鼻にねじ込んでやろうか！」

「そ、そんなことしたら奈留さんに怒られますよ。とりあえず奈留さんの様子も落ち着いたことだし、千夏さんもそろそろ一休みしたほうが……。昨日はちゃんと寝られましたか？」

「バッチリだよ、あたしなら全然平気。気にしない気にしない」

千夏はからりとした口調で言った。

ベッド下の床には、タオルケットが一枚落ちてている。千夏はそれを四つ折りに畳んで、水菜に手渡した。

奈留はプールサイドで倒れてからずっと水菜のベッドで眠り込んでいる。千夏は奈留の見張りを兼ねて、ベッドの側でタオルケットにくるまって一晩過ごした。

目を離すと、奈留が何をしでかすかわからないと思ったのもあるし、水菜の負担を減らしたいと思ったのもある。

幸い、奈留が暴れ出すこともなく、無事朝を迎えることが出来た。「今、お茶淹れますね。少しゆっくりしまししょう。そのあたりに座ってくつろいでいてください」

水菜は絨毯の上にクッションを置き、小走りでキッチンへ消えていった。

「水菜、あまり気を遣わなくていいよ」

「いいえ、せつかく千夏さんが来てくれたんだし」

水菜はそう言って、いそいそとお湯を沸かし始めた。

水菜の部屋は女の子の模範ともいえる部屋だった。

パステルピンクの絨毯にハート型のクッションが三つ置いてある。これは頻繁にお邪魔する千夏と奈留の分だろう。その色合いも可愛らしい。

床にはゴミ一つ落ちていないし、窓にかけられた花柄のカーテンからは、ほんのりと甘い香りがした。

千夏がクッションに座りくつろいでいると、やがて水菜がキッチンから戻ってきた。

水菜は手際よくティーセットをテーブルの上に並べた。そして陶器のティーポットを傾け、上品な仕草で紅茶を注いだ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。いや、悪いね、いつもいつも」

「いいえ、そんなことないです。千夏さんに頼ってもらって、その、嬉しいです……」

水菜はやわらかい微笑みを浮かべた。まるで水菜のまわりだけ花が咲いたように見える。「愛くるしい」という言葉は、水菜のような女の子を表現する時に使うのだと、改めて思った。

水菜はまさに、妹にしたいくなるようなタイプの女の子だ。

高校入学からの付き合いではあるが、水菜に対する信頼は奈留より深いかもしれない。

おっとりした性格、愛らしい瞳、小柄な体の割に豊満なバストの持ち主でもある。その全ての要素が奈留と正反対に出来ている。

水菜はティーカップを両手で挟むようにしてお茶を飲んだ。そしてティーカップをテーブルの上に置いてから、千夏に向かって尋ねた。

「ちなみに、奈留さんが見た火の玉って、一体どんな火の玉だったんですか？」

「実はね、あたしも現場を見たわけじゃないんだ。悲鳴を聞いて駆けつけたら、奈留が火の玉を見たって騒いでてさ。まあ、ずいぶん取り乱していたし、何か見たのは確かなんだろうけど……」

昨晚、千夏が奈留の元に駆けつけた時には、奈留はすでに何かを目撃した後だった。

「一晩経った今でも、それが本当に火の玉なのかどうかはわからない。」

「何かと見間違っただんでしょか」

「多分そうだと思うんだけどな。でも、なぐんか引つかかるんだよな」

「何か思い当たるところがあるんですか？」

「実はさ、昨日、屋内プールの周辺で変な子どもに会ったんだよ」
千夏は給湯室にいたパジャマ姿の少女の事を水菜に話した。

更衣室荒らしのあった女子更衣室に潜んでいた事。校内の一室でパジャマを着てくつろいでいたこと。奈留が火の玉を見る直前に、部屋を出て行ったことなど。

千夏の語る一通りの顛末を、水菜は口元に手を当ててじっと聞いていた。

「ねえ、水菜はこの火の玉の事、どう思う？」

「えっ、私、ですか？」

「うん。参考に水菜の予想を聞かせてよ。水菜の推理、頼りにしてるんだよ」

「そんな、頼りにされるほどのことじゃ……」

千夏が言つと、水菜は照れくさそうに俯いた。頬がほんのり赤く染まっている。照れ屋の水菜は、ちよつとした事で俯いて顔を赤くしてしまうのだ。

このように、少し人見知りな水菜は一見頼りない女の子と思われがちだ。

しかし、そのおっとりとした容姿にそぐわず、水菜はとても頭が良い。

物知りで頭の回転が早く、推理能力に長けている。謙虚で自分の能力をひけらかすような真似もしないので、この事実を知っているのは奈留と千夏くらいだ。

面倒事に首を突っ込みがちな千夏は、よく水菜に助言を聞きに来る。

「あの……、その、推測ですが、誰かが仕組んだ可能性は高いと思います」

水菜はそう言って話し始めた。

「最初は奈留さんの見間違えかとも思ってたんですが、千夏さんの話

に出てきた女の子が、まるで火の玉が起きるタイミングを知っていたかのように出て行ったのが引つかかるんです」

水菜は首を捻っていた。

実は千夏も同じ事を考えていた。あの時、例の少女は「そろそろかな」と思わせぶりな一言を呟いた。今考えれば、それはまるで何かが起きるのを予期していたようにも思える。

「それと、千夏さんは女子更衣室で掃除ロボットを見かけたと言っていたじゃないですか」

「うん、見た見た。ピラミッド型のあいつが更衣室の掃除を始めたよ」

「それなんですけど、本来、掃除ロボットは、月曜から木曜は夕方十六時から十分間、金曜日だと夜の二十一時からの三十分間でスケジューリングされているはずなんです。だから本当なら昨日の十九時に更衣室の掃除ロボットが動いているはずはないんですよ」

「えっ、そうだったの？」

「はい、スケジュールが変わって無ければ、なんですけど……」

「じゃあ、あの女の子のいたずら？」

「そこがちょっと自信は無いんです……。すみません」

水菜は頭を下げた。髪の毛はつやつやしていて、小さな頭の形はとても可愛らしい。

「ううん、ありがとう水菜。参考になったよ」

千夏がそう言っただけで水菜の顔を撫でると、水菜は顔を赤くしてしまっただけだった。

「ち、千夏さん、子どもじゃないですから、撫でないでくださいよ……」

「ああ、ごめんごめん。水菜は可愛くて頼りになるな、と思ってさ。それに比べて……」

千夏は奈留の様子を見た。

奈留は枕に頭を埋めて、眉をひそめている。なにやら苦しそうに唸っている。千夏が耳を近づけると、寝ぼけた声を出した。

「うん……、千夏のヒゲ……、ナマズ……、赤い……、イボ……」

「何だよその寝言！ あたしのヒゲとナマズがどうしたの？ 赤いイボって何？」

「千夏さん、こ、声が大きいです。奈留さん起きちゃいますよ」

危うく奈留を揺り起こすところだったが、水菜に制止され、慌てて手を引つ込めた。

奈留は顔をしかめたまま寝返りを打つ。よっぽど嫌な夢を見ているようだ。

「いろいろ不安なんですよ。幽霊の正体とか……」

「それで妙な夢を見てるわけか」

千夏はもう一度奈留の横顔を見て、軽く咳払いをした。

時計を見ると、午前十時を回ったところだった。千夏は一つため息をついた。

「……面倒くさいけど、仕方ないな」

ロケット日和(6)

休日の学校にはろくな思い出がない。

ブランコでどこまで高く飛べるか挑戦して、手首を捻挫したのも休日の学校だったし、キャンプファイヤーをして体育館を燃やしかけたのも休日だった。学園祭や運動会などの休日イベントでも、千夏は叱られた記憶しかなかった。

そういう苦い経験が記憶に積み重なって、千夏は休日の学校がすっかり苦手になった。よっぽどの用事が無いと、休みの日に学校へは行かなかった。

だから、こうして千夏が休日の校内を歩くのはとても久しぶりのことだ。

水菜の部屋を出て、学校へやってきた千夏は、真っ直ぐ屋内プールへ向かった。

目的は奈留が見たという火の玉の現場検証だ。千夏はプールの入口前に立ち、そつと中を覗う。

「開いてるかな……」

休日なので、屋内プールは閉まっている可能性があった。ダメ元で千夏はそつと扉を押してみる。鍵がかかっているかと思っただが、扉はすんなりと開いた。

「あれ、開くじゃん。ラッキー」

千夏は上履きと靴下をその場に脱ぎ捨て、中へ入っていった。

暗い通路を進み、プールサイドに立つと、その眩しさに思わず目をつぶった。

天井のドームから強烈な太陽の光が差し込んでいる。水面は揺れ、その表面に砕けた太陽が揺らいでいた。暗い通路から中に入った千夏は、その眩しさで目を開けていられないほどだった

目を細めて辺りを見渡してみるが、プールサイドに人影らしきものはいない。

「うーん、誰もいないのか……」

千夏はプールの縁にしゃがみ込んだ。

ちょうど50mプールの真ん中あたり。あの夜、奈留はこのあたりを指さして気絶した。千夏は改めて周辺を見てみるが、特に変わったところはなさそうだった。霊の仕業だとしても、そんな不穏な気配は微塵もない。

「異変はないよな……。わかりきってたことだけだ」

千夏は残念そうにため息をついた。

いたって普通のプールサイドで、怪しい物はどこにもなかった。

ここにおいても火の玉騒動の手がかりは掴めそうもない。千夏はそう結論づけ、ゆっくりと立ち上がった。すると、立ち上がった千夏の右足は、突然何者かに掴まれた。

「うわっ、何だ！」

驚いて足下を確認すると、冷たく濡れた手が千夏の足を掴んでるのが見えた。

足を上げて振り払おうとした千夏だったが、強い力で足を引かれ、バランスを崩してプールへ転落していく。

一瞬のうちに世界が変わった。

さっきまで立っていた眩しいプールサイドはそこには無い。全身を冷たい水が覆い、千夏の体は青く濁った箱の中に押し込められた。顔を上げると、水面に向かって空気の泡が飛んでいくのが見える。

千夏は慌てて自分の足首を触ったが、捕まっていたはずの足首は解放されている。

そして、戸惑う千夏の目の前を黒い影が横切った。それは水面へ上り、プールから出て行く。千夏は必死に腕を動かして後を追った。
(本当に幽霊……?)

千夏は一瞬頭に浮かんだその発想を、すぐに消し去った。千夏が

水面から顔を出すと、プールサイドに誰かが立って、こちらを見下ろしていた。

目を細めて、その影をよく見つめた。

黒い影は千夏を見下ろしていた。若い女の子のシルエット。輪郭だけ見ても、やたらスタイルがいいのがわかる。最近の幽霊はプロポーションも良くないとやっていけないのだろうか。そんな事を考えていると、その人影は千夏に向かって声をかけた。

「あれー、やっぱり千夏っちゃん　ちーす！」

スクール水着を着た女の子が、千夏に向かってピースサインを作っていた。

女の子は水泳帽にゴーグルをかけている。健康的な肌と細く引き締まった手足が印象的だった。千夏がぼかんと口を開けていると、その女の子は千夏の前に屈んだ。

「千夏っち、どうしたの？　ぼかんとしちゃって」

「何であたしの名前を……って、お前、美葉か？」

「そうだよーん」

女の子は両手を振った。

目の前にいる女の子は、一年三組の上原美葉だ。

「じゃあ、あたしを引きずり込んだの美葉か！」

「ハハハ、ごめんね、つい」

美葉は水泳帽とゴーグルを外した。

短めの髪の毛から水滴がはじけ飛んで、乾いた地面を濡らした。

美葉は水泳部に所属する一年生で、千夏たちと同じ寮生だ。

実家はそれほど遠くないが、通学時間短縮のため寮に入っている。上原美葉と言えば一年生のアイドル的存在だ。活発で美人でスタイルが良い。一年生に聞けばすぐに名前が挙がるような生徒だった。

「千夏っち、とりあえずプールからあがりなよ」

美葉はそう言って千夏に手を差し出した。

千夏は美葉の手を借りてプールサイドにあがった。たくさん水を吸い込んだ制服が、びしゃびしゃと音を立てた。

「あはは、ずぶ濡れじゃん」

「誰のせいだ。誰の！」

制服がべつたりと張り付いて体が重かった。千夏はスカートをたくし上げて、ぞうきんのように水を絞る。ちよつと絞るだけで、蛇口を捻ったように水が出てくる。

「でも千夏っち、どうしたの？ 一人でプールに来るなんて」

「いろいろあつてさ、まあ、ちよつとした調べ物だよ」

「ふーん、まあそこに座つてよ。水絞らないと風邪ひいちゃうでしよ」

美葉に肩を押され、千夏はプールの縁に座った。

美葉は当然のように千夏の隣に座り、体を寄せてきた。

「ちよ、ちよつと、何で密着するんだよ」

「ふふふ、いいからいいから。絞るの手伝ったげる」

美葉は両手の指をうねうねと動かした。それは悪質なマッサージ師のようないやらしい動きだった。

「その指の動き、明らかに水を絞る動きじゃないだろ！」

「大丈夫、大丈夫、大丈夫……？」

「何で最後疑問形？」

「ごめんごめん、気にしないで気にしないで。まあ落ち着いて」

美葉はそう言って、千夏の体をなで回してくる。

「ちよつと、どこ触ってんだよ」

「うーん、千夏っちって、意外とエロい体してるんだよねー。こう……、スリムなのに、胸もそれなりに大きくて、太もも締まってるし、あ、ウエストもすごい細い」

「こ、こら、脱がすな、近づくな、乗っかるな！」

美葉は千夏のブラウスのボタンを外そうとしてくる。慌てて抵抗したが、美葉はそんなのお構いなしに、千夏にのしかかってくる。

「ふふふ、柔らかかそうなくせ毛もキュートだし、ぱっちり二重で、控えめな唇もカワイイんなー。うーん、すごくイタズラしたくなっちゃう」

美葉は千夏の顔を両手で挟んだ。

いつの間にか体を乗り出して、完全に千夏に覆い被さっている。

美葉は瞳を潤ませて、顔をじつと近づけてきた。さすがに耐えられなくなった千夏は美葉の肩を掴んだ。

「いい加減にしろ！」

千夏は後ろに倒れ込み、足で美葉の体を持ち上げてプールに投げ飛ばした。柔道の巴投げだ。技は綺麗に決まり、美葉は頭からプールに落っこちた。

「ぶはっ、千夏っち、何するの」

「エターナルシュート千夏投げだ」

「ただの巴投げじゃない！ 投げ飛ばすなんてひどいよ」

「美葉は放っておくとどんどんエスカレートするからな。今日は久しぶりに危なかった」

「ううう、わたしがまとわりつくのは千夏っちだけなのに……」

「あたしだけでもダメ！」

千夏が言うと、美葉はしゅんとなった。しかしこれは一過性のもので、一時間もすればまたベタベタと抱きついてくるようになるだろう。

人気者の美葉の唯一の欠点は、千夏に対する過度のスキンシップ癖があるということだ。それは一度始まると叩くなり投げ飛ばすなりしないと止まらない。

何故か美葉がターゲットにするのは千夏だけで、千夏は美葉の暴走を止めるのにいつも苦労していた。

脱がされかけた制服を直すと、美葉は上目遣いで千夏に訴えかけた。

「だって、一人でプールにいて寂しかったんだもん」

「そうやって演技したってダメ。急に『もん』なんて変な口調で喋ったって、騙されないぞ」

「『もん』なんて言ってるよ！」

「言ってるよ！」

「ちえ、今回は水菜っちみたいなかわいい系で攻めてみたけどダメか……」

美葉は小声でばやいて、ラッコのように水を背に体を浮かべた。水泳部だけあって、水にとっても慣れているようだ。美葉はぐるぐると円を描くように水面を泳いだ。

「相変わらずだな、美葉は。今日は水泳部の練習？」

「そーだよー。偉いでしょ」

「そうだな、偉い偉い」

「じゃあイタズラさせてくれる？」

「じゃあつて何だよ！ ダメだよ」

千夏が言うと、美葉はふくれ面で水中に潜ってしまった。

美葉の所属する水泳部は規律に厳しい。

部指定の競泳水着でないと、練習の参加も、大会への参加も許可されなかった。体育の授業で着るスクール水着では、練習参加は出来ない。

水泳部一年生の美葉も例外ではなく、ちゃんと指定の競泳水着は持っていた。

しかし、その水着は二日前に更衣室荒らしの手によって盗まれてしまったのだ。

肝心の競泳水着が無いと練習に参加出来ず、美葉はこうして一人の練習を余儀なくされていた。

中学時代から水泳部で慣らした美葉は、一年生の即戦力として期待されていた。今回の騒動は、美葉にとっても水泳部にとっても大きな痛手だった。

美葉はプールから上がって、千夏の隣に立った。

「千夏っち、早く着替えないと風邪ひいちゃうよ」

美葉に言われて、千夏は自分の制服をつまんでみた。

一分の隙が無いほど濡れている。乾くまでには相当時間がかかりそうだ。

「着替えたいのは山々なんだけど、持ってきてないからな、着替え……」

千夏は肩を震わせた。水に濡れたままだと、夏とはいえ寒い。そんな千夏に、美葉はからりとした口調でこう言った。

「あ、それなら大丈夫。わたしのジャージ貸してあげるから」

「え、いいの？」

「もちろん！ シャワー室もあるから、ちょっと浴びてきちゃいなよ」

「ありがとね。ちょっと制服乾くまで借りるよ」

「うん、ちゃんと返してね」

「当たり前だよ、ちゃんと洗濯して返す」

「いい、いいの！ 洗濯はいいの！ 洗濯しないほうが、ね？ ……」

「ぶひっ」

「ぶひ!?!」

「あ、何でも無い何でも無い。心の声。さあ、行こう行こう！ 楽しい楽しいシャワー室！」

美葉に押されるようにして、千夏はシャワー室へ連れ込まれた。

案内されたシャワー室で、美葉は水着姿のまま鼻歌を歌っていた。シャワー室の中は意外に広かった。三つほどシャワー台が備え付けられており、大きめの浴槽までついている。

千夏は足下に気をつけながら、そろそろと歩いた。

濡れた制服と下着は脱衣所に置いてきて、タオルは美葉のものを借りた。美葉はシャワー片手に温水の調節をしている。

「ほらほら、座って座って」

「何で美葉まで入ってくるんだよ」

「いいじゃないじゃない。せつかくなんだし。私が体洗ってあげる」

「いいよ、練習に戻れよ」

「いいのいいの、休憩休憩。ほらほら、洗っちゃうよ」

美葉は丸いお風呂椅子を置いた。

千夏がそこに座ると、美葉は頭上からシャワーを浴びせてきた。

一瞬首を竦めたが、冷えた体に温かいシャワーは気持ちよかった。首筋をお湯が伝っていく。

「さ、力抜いて……、背中流してあげる」

背後に立っていた美葉は千夏の肩に手を置いた。

「だから、一人で出来るつつうの」

「そんなこと言わないで……。ね？」

美葉は千夏の背中に胸を押しつけてきた。

水風船のような弾力のある感触が背中から伝わってくる。

その体勢のまま、美葉は千夏の耳元に息を吹きかけてきた。千夏は身震いし、反射的にシャワーを奪って美葉の顔に向けた。

「きゃっ！ 千夏っち、もうう、何するの」

「少し頭を冷やせ」

「じよ、冗談だつてー。……半分はね」

「半分なの？ 全然信用出来ないよ！」

千夏はシャワーの勢いを強めて、美葉を追い払った。美葉は口先を尖らせながら、千夏から離れていった。

とりあえず安全な間合いを確保して、千夏は洗面台に手を伸ばす。

「本当に手伝わなくていいの……？」

美葉は少し離れた位置からじろじろとこちらを見ている。

「美葉に任せておいたら何されるかわからないし」

「そんな、わたしは全然淑女よ。最初だからゆっくり時間をかけて千夏っちの全身を洗って、それから……」

「はいはい、わかったわかった」

美葉がよからぬ妄想を始めたので、千夏はそれを無視して体を洗い始めた。

「でも、やっぱり場所は保健室がいいかな。千夏っちには白衣を着てもらって、わたしは聴診器で上から順番に」

美葉はまだよくわからない妄想を続けているので、千夏は放っておくことにした。

妄想で気が済んでいる内はまだ良い方だ。今のうちに体を洗ってしまおうと、千夏はシャンプーを泡立てて髪の毛に馴染ませた。

千夏の髪の毛をシャンプーの泡が滑り落ちる。そして千夏は、泡から覚えのある香りがするのに気がついた。

「あれ、このシャンプーって……」
千夏は泡を指で取ってにおいを嗅いでみた。

そこからは青リンゴのような爽やかな香りがした。覚えがあると思つたら、それは昨日、少女の髪から香ってきたものと同じだったことに気づく。

「ねえ美葉。このシャンプーって、水泳部のみんなも使ってるの？」

「えっ、どうしたの、そんな事聞いて。たぶんみんな使ってると思うよ。まあ、自分用のシャンプーを持参する子も多いけど」

「あのさ、変な事聞くようだけど、水泳部にこんな子いない？ 小学生みたいに背が小っちゃくて、目がじとーってしてて、短めの髪が片側だけハネてて、ぼそぼそと喋る変わった子」

千夏は昨晚見かけた例の少女の特徴を挙げてみた。美葉は顎に手を当てて考えている。

「んー……、背が低くて、ジト目で、髪の毛が跳ねてる……」

「やっぱりいない？」

「あー、心当たりはあるけど、あれかなー」

「心当たりって、だれだれ？」

「幽霊」

美葉はさらっとした口調で言った。

千夏の手が止まった。眉間を伝って鼻先に泡が流れ落ちてくる。

「幽……霊……？」

「そうそう、知ってる？ プールサイドに現れる幽霊の噂。 夜に

人影を見たって報告があってね、その特徴がちよっと似てたから」

「夜に人影って……」

「あーっ、千夏っち信じてないでしょ。本当だよ、最近プールサイドの備品が無くなったり、用具室が開かなくなったり、変わったことが多発しているんだから。水泳部の間じゃ噂だよ。幽霊が現れるようになったって」

その時、千夏の脳裏に浮かんだのは、昨日出会った少女の顔だ。

確かにあの少女は独特の雰囲気があった。

フランス人形のように無表情で、口数も少ない。幽霊だと紹介されても、きつと納得してしまうだろう。よくよく思い返してみれば、おかしな所がたくさんある。

「千夏っち、何か心当たりあるの？」

「あ、いや、ちよつとね……。はは」

千夏は引きつった顔で笑ったまま、蛇口を捻った。頭からお湯を被り、髪の毛についた泡をシャワーで洗い落とした。千夏の中で、謎は大きくなるばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2895ba/>

ロケット日和

2012年1月14日09時50分発行